

『現代思想』（青土社）、二〇〇四年一月号（特集マトリックスの思想）／ pp.214-227*.

*プレプリント版のため、雑誌掲載版とはページ表記が違います。引用の際は、右上のページ表記（雑誌掲載版のまま）にてお願いします。

明晰夢、死、転生

——世界という夢から覚めるために——

渡辺 恒夫

I 明晰夢——夢の中で醒める

映画『マトリックス』の中で最も秀抜なシーンをあげるならば、主人公ネオが、ヴァーチャルリアリティ 仮想現実界から「覚醒」する場面、何本もの管につながれ水槽に入れられて、蚕棚さながら、おびただしい眠れる人体の間に横たわっている自分自身を見出し出す場面だろう。何人か、友人に訊いても同意見だったし、また、多くの人々が、映画館を出て、この世はほんとうは仮想現実界ではないのか、と疑ったと聞く。けれども、この種の疑いは、私たちにとって、子どもの頃から、そしてまた大昔から、馴染み深いはずではなかっただろうか。そう。。。この世は、ほんとうは夢ではないか、という疑いである。

I・1 明晰夢とは何か

馴染み深いといっても、ふつうの人々が、この世は夢ではないか、とやたらに疑うということは、少々考えにくい（後に書く、子どもと死を控えた人々のばあいを除いて）。ところが、ここに、数週間の間、絶えず、「この世は夢ではないか」と疑うよう指示された、何人かの不運な（？）人々がいる。明晰夢の脳波実験の、「実験協力者」¹ になった人々だ。

明晰夢 (Lucid dreaming) とは、夢の中で、「あ、自分は今、夢を見ているんだな」と自覚し、ばあいによっては思うとおりに夢の展開をコントロールさえできるという、特別な種類の夢につけられた名だ。自覚夢ともいう。すでにアリストテレスが明晰夢の存在を指摘しており、一九世紀の夢研究者、エルヴェ・ドウ・サン・ドニ侯爵などは、明晰夢を自在に見て操る方法を組織的に探究し、部分的に成功を収めている。

その名著、『夢とその操縦法』（一八八七、本邦未訳）によると、

そのための訓練を始めて二、三ヶ月たった第一段階では、今、自分が夢を見ている最中だと自覚するようになった。第二段階では、面白い夢になるとそれを記録するために随意に目覚められるようになった。第三段階では、夢のどんな部分でも、そこを深く探りたいと思えばその部分に注意を集中できるようになった。最後の段階では、夢を少なくとも部分的に、自在に操縦できるようになった。もつとも、これには限界があった。

たとえば、自分が死ぬ夢を見ようと思ひ、自分の夢を操って自分を塔の上に連れてゆき、そこから身を投げた。その瞬間、塔の上から身投げした男を、自分も群集に混じって見物している夢になってしまった²。

けれども、明晰夢が真に脚光を浴びるのは、一九八〇年代、スタンフォード大の夢科学者ステイブ・ラバージが、明晰夢を見ている最中、「今、明晰夢を見ているぞー」という合図を、眼球運動の形で、外部世界（脳波記録装置）に送り出すことに成功してからだ。サン・ドニ侯爵の個人的な試みから一世紀以上のこのこと。その間、フロイトの『夢判断』が現れ、ユングの元型説が現れ、レム睡眠が発見され、そして、いずれもいささか輝きを薄れさせていた、そんな時代だった。

I・2 夢の中で醒める

【事例1】 巨大で堅固な城の奥深く、高い丸天井の着いた通路をさ迷い歩いていた私は、その素晴らしい建築様式に感嘆して足を止めた。周囲を取り巻く荘厳な建築物に目を凝らすことが刺激になったのか、私は気づいた——自分は夢を見て、と！明晰な意識のもとでは、今しがた感銘を受けた城の華麗さはいつそう驚

異的に思われ、私は大いにわくわくしながら想像上の現実である私の「空中楼阁」の探検を始めた。通路を歩いていると、足元の石のひんやりとした硬さが感じられ、足音の反響も聞こえた。この魅惑的な光景は何もかも現実と思われた――すべてが夢であるという自覚をずっと保っていたにもかかわらず！

これは、ラバージ³が語っている自分の夢の一場面である。このように明晰夢の特徴は、夢を見ているという自覚と、夢の鮮明さ、迫真感が、相伴ってあらわれる点にある。明晰夢とは、精巧な仮想現実界そのものなのだ。

それでも、疑い深い心理学者たちは、「夢だと自覚した瞬間には、実際には眼が醒めていたのだろう」とか、はては、「夢と自覚したという記憶自体が、目覚めてから作られた偽記憶かもしれない」などと、難癖をつけるのだった。そこで、ラバージの採用した実証方法は、独創的なものだった。

まず、自ら被験者となり、頭部と顔面、そして手首に電極を貼られ、^ポリ^グラフ^ラフ^フ脳波計に接続されたまま実験室で一晩眠った。夢だと自覚した時には、あらかじめ打合せておいた眼球運動と握りこぶしの運動によって、モールス符号化された自分のイニシャルを、夢の中で表現した。すると、ポリグラフの記録紙の上に、確かに、眼球運動と手首の痙攣の一定のパターンとして、ラバージのイニシャルが描き出されたのだった⁴。夢の内部から、外部世界への、リアルタイムでの交信が可能になったのだ。

I | 3 夢の中での自己意識

筆者は、鳥居鎮夫⁵の紹介でラバージの実験を知って以来、明晰夢実験の準備を進めていたが二年程前、夢の中からの合図の受信に

表 1 明晰夢誘導法（抜粋）

- ① まずは明晰夢を見ようという意思をもつこと。
- ② 毎朝最低ひとつ、できれば2つ以上の夢を思い出せるようにする。夢を思い出しやすくする工夫…（略）
- ③ 普段の生活の中で、「今、ここに自分がいる！」と頻繁に意識するようにする。
- ④ 普段から「これは夢ではないか？」と自問する習慣をつける。

成功した。それについては他のところで書いたので、ここでは省略する。明晰夢の実験を始めていらい、テレビや健康雑誌の取材をしばしば受けるようになったが、決まって受ける質問は、「明晰夢研究は何の役に立つのか？」である。それに対しては、「明晰夢を自在に操れる明晰夢誘導法を開発すれば、夢の中にいながら夢分析ができるようになるだろう」だの、「PTSDの症状である反復的な悪夢を良

い方へと変えられるようになるだろう」などと、いい加減な効能書きを並べることになっている。けれど筆者の関心はもつと別のところにある。

表1は、筆者の東邦大学心理学研究室でラバージの誘導法を参考にして作成した、明晰夢誘導法（明晰夢を見やすくする訓練法）だ。実験の二週間ほどまでに、実験協力者（被験者）に渡して使っていたことにしている。ここで、①、②、④は分かるとして、③「今、ここに自分がいる！」と頻繁に意識するようにする。」とは、どういう意味なのか、いぶかる人もいるかもしれない。

【事例2】六歳か七歳位の頃、晴れた日の正午頃、二階の部屋にて、窓からさしこむ日差しをボーッと見ている時に、私はどうして私なんだろう、私はどうしてここにいるんだろう、と思った。

（19歳⁺。傍点引用者）

これは、自我意識が誕生した瞬間が回想的に捉えられている、印象深い事例だ。このような体験事例を、ワイマール時代の発達心理学者シャルロッテ・ビューラーの著述から用語を借りて、「自我体験 Ich-Erlebnis」といい、日本に限られるが、組織的な調査研究が始まっている。この事例でみると、東京都町田市の家にいるものの、神奈川県のある学校にいたのだといった自明な知識ではなく、「自分がここにいる」と、抽象的にしてしかも絶対的な事実を意識したことから、「なぜ自分はここに居るのか？」という自我体験の問いが生じていることが分かる。「某県某町某番地某家の二階の部屋」といった具体的で自明な場所と、「ここ」との、結びつきの必然性が見つからないという「自明性の喪失」が、自我体験の感情的情緒的基盤なのだ。

「今」についても同様で、「今」が二十一世紀の初頭という特定の時点に位置しているという自明の事実が疑問に付されたところから、たとえば次のような自我体験の問いが生じると思われるのだ。

【事例3】何歳頃かは覚えていないけど、よく思ったのは、なぜ今なのかということ。何千年も前から人間は生活していたはずである。(……) りんね転生³ということがあるが、誰かの生れ変わりだとしたら自分が死んだ後、また誰かに生まれ変わるのだろうか。

(21歳⁴。傍点引用者。)

実に、「今、ここに自分がいる」という自覚は、真に自己意識の名に値する高度な自己意識、内省的自己意識の出現の指標なのである。スローターの導師グルジェフによると、「今、ここに自分がいる」と自覚している間だけが、真に意識がある状態だという。その他の状態は眠っているようなもので、しかも、「今、ここ」の自覚を持続させることは極めてむずかしい。明晰夢誘導法^③とは、日常的に覚醒状態での内省的自己意識を強化することによって、夢の中に自

己意識を出現させることが、狙いどころなのだ。

このことからして、元々鋭敏な自己意識を備えた人のほうが、明晰夢を見やすい、ということが予測される。そこで、筆者の研究室では、明晰夢質問票なるものを作成し、「自意識尺度」という、自己意識の強度を測定できる心理テストの一種と同時に、学生三〇〇名に回答させてみた。すると、自意識尺度の中でも、「自分自身を観察する傾向」である「私的自意識得点」が、明晰夢をよく見る傾向と正に相関することが分かった。他方、「人目を気にする傾向」である「公的自意識得点」のほうは、明晰夢を見る傾向とは何の関係も見出されなかった。

I-4 この世は夢ではないかという疑いと明晰夢

かくして、夢の中で「夢ではないか」と疑う明晰夢は、夢の中で自己意識が出現した状態に他ならない。ここで思い出されるのは、デカルトが、「われ思う、ゆえにわれ在り」の原理に達する前に、この世は夢ではないかと疑い、不安になったという話だ。筆者の自我体験調査でも、子どもの頃の自我の自覚が、この世は夢ではないかという疑いと相伴っている例が、いくつも見出されている。昼間、この世は夢ではないかと疑うのもまた、内省的自己意識の現われの一つなのである。

それにしても、なぜ、「この世は夢ではないか」などという疑いが、人類の精神史上、始まったのだろうか。この疑いが、やがて、真の实在——本当に存在するもの——とは何か、という、哲学的論争に発展してゆくと考えられるだけ、そのきっかけは重要だろう。夢というものがあるからだ、というのが一つの解答だが、単に夢を見たというだけでこの疑いが生じたとは考えにくい。筆者の想像では、誰

かが明晰夢を見たことから、すべてが始まったのである。

この仮説を実証するのは、正直いってむずかしい。けれども、個体発生は系統発生をくりかえすというヘッケルの言に一片でも真理があるとするならば、子どもにおける自我体験と明晰夢体験の関係を探るのが、ひとつの方法になるかもしれない。この場合、明晰夢とは、鮮明さやコントロール可能といった、狭い意味の明晰夢の要件をすべて備えていなくとも、よいのである。ただ、モンスターに追いかけれられ、必死に逃げ回っているうちに突然、これは夢ではないかと気づいたといった程度の、より月並みな自覚夢でも、子どもにとっては内省的自己意識誕生のきっかけとなるかもしれない。

明晰夢には、いまだ謎に包まれている、自己意識誕生の秘密を解く鍵が、隠されているのかもしれない。

II 死と転生——世界という夢から醒める

この世は夢ではないか、と疑い出したら、次には世界という夢から醒めるにはどうしたらよいか、そして、真の目覚めの世界（そのようなものがあるとして）とはどのようなものか、という難問が待ち受けている。

露と落ち露と消えにしわが身かな浪速のことも夢のまた夢

秀吉のこの辞世の歌にも典型的に表れているように、多くの人々が、死に直面して今までの生涯を「夢」というメタファーでもって理解しようとしたのは、けっして文学的修辞上の事として片付けられることではない。とはいえ、「それなら夢から醒めた真の世界とはどんなものか？」という問いに対しては、当の秀吉を始めとして、

はつきりした観念を抱いていたわけではないだろう。

筆者の思うに、世界という夢から醒めた世界には、二種類がある。第一は、世界という夢から覚めても、また、似たような世界が始まる、という場合だ。つまり、他の誰かとしての人生が始まるという、転生輪廻だ。第二は、現在の意識からは想像もつかない、超、越、的、な状態への移行である。

II・1 ヤージニャヴァルキヤと梵我一如

第二の方から見てゆこう。こちらの説の代表は、紀元前千年から八百年ごろにかけて、聖典ヴェーダの後を受けてブラーフマナ文献や古ウパニシャッド（奥義書）の中で展開された、梵我一如の教えだ。つまり、真に目覚めた人の アートマン 自我は、死後、宇宙原理としての ブラフマン 梵 と合一するのである。

「自我 アートマン とはいかなるものですか、ヤージニャヴァルキヤ殿？」
紀元前八百年ごろ、ジャナカ王の宮廷で開かれた公開討論会で、あるバラモンに問われて、哲人ヤージニャヴァルキヤは答える：：「あなたは、見る作用の主体である人見る者Vを見ることはできません。聞く作用の主体である「聞く者」を聞くことはできません。思う作用の主体である人思う者Vを思うことはできません。知る作用の主体である人知る者Vを知ることとはできません。：：万物を認識する認識主体を、どうして認識できるでしょうか。だからこれを、ネーティ（ではない）、ネーティ（ではない）、のアートマン（自我）と言うのです。」

私たちは、とかく、自己というものを、自分の体であるとか、感覚や感情や記憶であるとか、知識や思考であるとかといった「何ものか」だと思ひ込み、同一視しがちだ。けれども、自己を「何か」

だと認識したとたんに、自己は主体ではなく対象となってしまう。だから、自己とは、「アレではない、コレでもない」と、否定形によつてしか言及できない。そのように、自己は「∴∴ではない、∴∴ではない」と、虚偽の同一化を次々と否定してゆく果てに、忽然と、
ブラフマン
アートマン

梵 Ⅱ 自我 一体の境地が開けるだろう。何ものでもないものは、
ブラフマン
アートマン
全てでもあるからだ。
けれど、そんな梵我一如の境地も、生身の肉体を持って生きていく限り、長続きしない。だから、生きている間にできる限り修行を積んで虚偽の同一化を脱することに努めるべきだ。「死後、梵と合一しようと思ひ定めた者には、もはやどのような恐れもない。」ヤージニャヴァルキヤは説く。

ただし、梵我一如の境地に無縁だった者のためには、通俗的な意味での輪廻転生が待っている。感覚やら感情やら思考やらを「これが私だ」と思ひ込んだがために、ほんとうにそれらは私の一部となつて靈魂といったカタマリを形成してしまう。そして、別の肉体の中で新たな生を始めることになるのである¹⁰。

Ⅱ・2 自我の多数性は幻^{マヤー}か？

それにしても、死後にアートマンがブラフマンへと合一しようとすることは、実は、両者は最初から同一だったということではないか。私たちは、単にそれに気づかず、虚偽の世界、^{マヤー}幻の中に生きていくだけではないか。紀元後のインド世界で正統的思想の地位を占めるにいたったヴェーダーンダ学派のなかでは、このような考えが強くなり、やがて、八世紀に出たシャンカラの手で、梵我の絶対的同一を説く不二^ア一元論^{ドヴァイダ}としてまとめ上げられる。

けれども、ここで、新たな難問が発生する。ブラフマンは宇宙で

唯一の存在だ。そのブラフマンと絶対的同一であるとするならば、アートマン（＝私の真の自己）もまた、宇宙で唯一でなければならぬはずである。ところが、やっかいなことに、他人というものが数多く存在する。地球上だけで何十億、もし他の星にも私たちのような自我をもつ生命体があって、それらすべてが「他のアートマン」だとすると、宇宙唯一の筈のブラフマン＝アートマンが、無数にいることになってしまわないか？ヴェーダーンダ学派の中で、自我の多数性のアポリアをめぐる、論争がおこなわれるようになる¹¹。

時代が下るにしたがって、ヴェーダーンダ学派はヨーガ学派と一体化し、瞑想修行によってブラフマン＝アートマンの絶対的同一を直接に感得しようという、神秘主義の傾向がよまる。ロマン・罗兰も伝記を書いている聖者ラーマクリシュナなど、その代表格だ。けれども、何といっても、注目すべき不二元論の現代的発展は、「波動方程式」で量子力学の歴史に名を留める、オーストリアの物理学者シュレーディンガーに見出されると、筆者は思う。

II・3 シュレーディンガーとクリスタルの比喩

物理学者ならぬヴェーダーンダ的な哲学者としてのシュレーディンガーの出発点は、「なぜ私は私の兄ではなく、私の兄は私ではなく、私は遠縁のいとこのうちの一人ではないのか」という疑問だった。

このような問いを、筆者は、意識の超難問（harder problem of consciousness）と呼ぶことにしている¹²。また彼は、くり返し、「意識は常に唯一のものとして体験される」と述べ、一元的な自我意識を表明している。そうして、「このように観察し、また考察した結果、君は、かのヴェーダーンダ哲学の根本確信には十分な妥当性

があるということ、即座に理解することになる」という。すなわちそれは、自我の「多数性は見かけだけの物で、本当は一つの精神があるだけだ」という考え方であるという¹³。

では、なぜ、そしていかにして、自我の多数性という「見かけ」（＝マーヤー）が生じるのか。ここでシュレーディンガーが持ち出すのが、多面体クリスタルの比喩だ。「……このクリスタルは、現実には一つのものを、無数の似姿にして映し出しはするが、これに

よって対象物が現実が増加するのではない。」

このクリスタルの比喩を図解したのが図1だ。唯一の意識（自我）であるブラフマン（アートマン）の虚像が、客観的世界の中に、W、B、C、Dといった個々の自我として映し出されているわけだ。

この、死生観のシュレーディンガーモデルに従えば、「なぜ、今、ここにいるのか？」

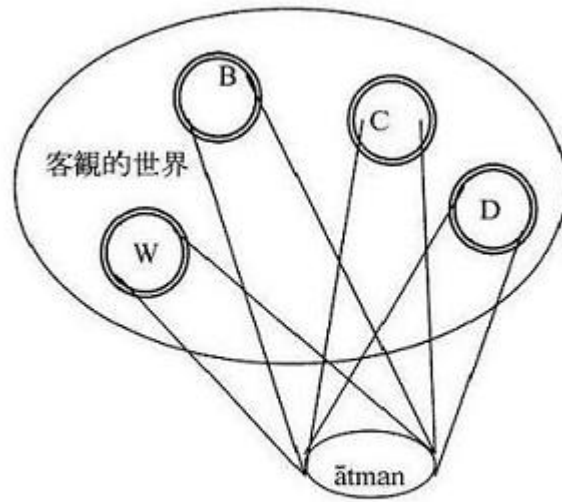


図 1¹²

「なぜ私は他の人間ではないのか」といった「超難問」の問いには、こう答えればよいことになる。——これらの問いは問題にならない。なぜなら、^私vはあらゆる^今、ここvにいたし、いるし、いるだろうから。そして、また、全ての他の人間は私なのだから、と。シュレーディンガーは力強く語る……。

……確かにあした大地が私を呑み込むとしても、あらたな奮闘と苦悩に向けて大地は再び私を生み出すことであろう。それはい

つの日にかということではなく、いま、今日、日々に大地は私を生み出すのである。それも一度のみならず幾千回となく、まさに日々に私を呑み込むように、大地は私を生み出す。

II・4 「梵我一如」から「刹那転生輪廻」へ

ヤージニャヴァルキヤからシュレーディンガーまで、およそ二七〇〇年間の梵我一如思想の展開を概観して、ここで奇妙な事実に気づかないではいけない。「現在の意識からは想像もつかない、超越的な状態への移行」説の代表的な流れを追っていたはずが、最後にいたって、一種の転生輪廻説へと帰着してしまっているように思われるのだ。シュレーディンガーにあつてはもはや、ブラフマンと合一した状態とはどのような状態であるかの問いは、主要な関心事ではない。具体的な個々の他人が、いかにして私でもありうるかを、つまり私の遍在を、納得することのほうが重要なのだ。

そこで、シュレーディンガーに従って、私が同時にあらゆる他人であり、今日地球上に生まれた幾千という赤ん坊も実は私なのだと、想像してみよう。けれども、たちどころに分かることは、そのような想像が不可能事だということだ。あるいは、聖者ラーマクリシュナのように瞑想修行を積み、そのような境地に達するというのだろうか。自分で実感不可能、理解不可能な事柄には、沈黙を守ることにしよう。そして、私が同時代のすべての人間でもあるという、せつかくたどり着いたこの深遠な教えを、より納得がいくように説明できる、別の世界観を捜し求めることにしよう。

ここで考え付くのは、時間的差延の論理だ。図1で、私（W）と個々の他人B、C、Dは、同時に存在しているように見えても、実は、時間的に食い違っているのかもしれないか。

たとえば、大乘仏教では、刹那滅ということを説く。世界は刹那という極微の時間的単位¹⁴ごとに、滅してはまた生じることをくりかえす。これが実は、空ということ、無常ということ、また縁起ということの、存在論的な意味なのだ：¹⁵。

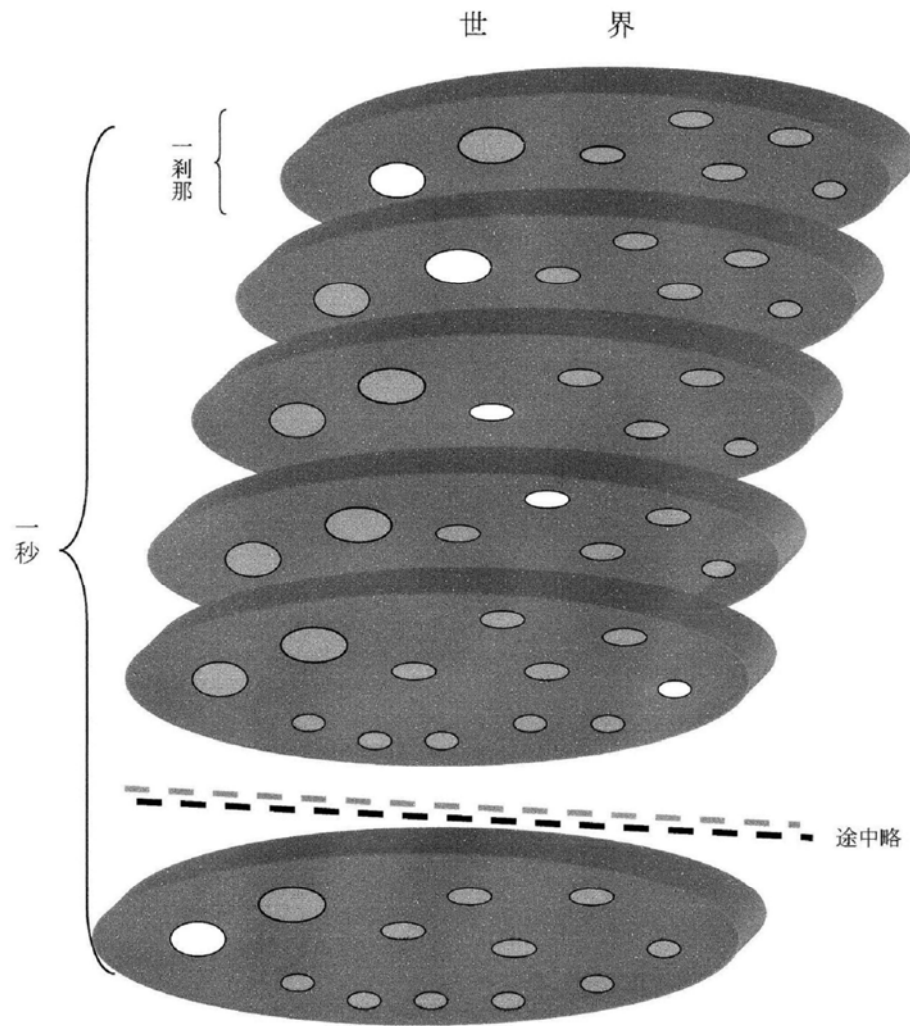


図2 刹那生滅する仏教的宇宙像の中での刹那転生輪廻。私（白抜きの小円）は一刹那ごとに転生することによって、たとえば1秒間といった短時間のうちに世界の全ての人間（小円で表示）となる¹²。

七世紀インドの仏教論理学者ダルマキールティによって精緻な論証に仕立て上げられた、この刹那滅コスモロジーを下敷きにするならば、「渡辺恒夫が私であるような世界」は一刹那後には滅し、「アメリカ大統領ジョージ・ブッシュが私であるような世界」が新たに生じ、さらに一刹那後にはそれも滅して、「今、渡辺恒夫がこの原稿を書いている喫茶店のウェイトレスが私であるような世界」が生じる、ということになる（図2参照）。そのようにして、「渡辺恒夫が私であるような世界」が短時間のうちに何度でも生じるがために、

あたかも映画の上の人物が連続的に動いて見えるように、今、この瞬間に渡辺恒夫である私は、これまでも連続的に渡辺恒夫であったように感じる：¹⁶。

ここで、刹那転生輪廻とは、多数の「アートマン達」が互いに転生しあう、といった事態を意味しているのでは毛頭ないことを、念押ししておきたい。アートマンが多数並存していたら、「なぜ私はこのアートマンであって他のアートマンではないのか」という意識の超難問が、再発生するだけだろう。あくまでも、一元的な自我意識、意識の唯一性の直観を保持しつつ、同時に超難問を解決しうる世界観¹⁷ 死生観として、刹那転生輪廻は提起されねばならない¹⁷。

II | 4 刹那滅と中込照明の唯心論物理学

仏教的刹那滅宇宙によって基礎付けられた刹那転生輪廻とは、「私が任意の誰かであるような宇宙が、次々と滅しては生じる」というコスモロジーだ。これは実は、「私が任意の誰かであるような主観的体験世界が、次々と滅しては生じる」という、唯心論的世界を意味している、考えるべきである。もし、これを、一方に確固たる物質的世界があり、他方にアートマン（¹⁸私）があるという二元論的構図によって解釈してしまうならば、世界全体が刹那滅する必然性は失われる。唯一不変の宇宙に無数に生存する知的生命体の間を、超高速でアートマンが飛び回ればよいからである。けれども、そのようなイメージでは、決して対象化できないはずのアートマンを、対象化して把握することになってしまうだろう。

周知のように、唯心論は、科学者や、科学を盲信する知識大衆の間では評判が悪い。ところが理論物理学の中込照明は、唯心論的世界モデルこそが、観測問題など量子力学の難問を解決するとして、

『唯心論物理学の誕生』¹⁸という本を出している。

理論物理の本を、私のような文学部出身がへたに解説すると誤解の種になりかねないので、詳しくは現物を読んで貰いたいのだが、出発点は「物理をやっていると意識は存在しないという結論になつてしまう」という思いだ。観測主体を排除して構築されたのが物理学的世界だから当然で、その結果、相対論的宇宙には「今」の居場所がなくなつてしまふし、量子力学でも観測問題をはじめとする種のアポリアが生じる。そこで中込は、意識や「今」や自由意志を最初から含んだ唯心論的世界モデルを数学的物理学的に構築し、これをライプニッツの概念を借りてモノド論と銘打った。世界は「私の世界」モノド」であつて、この中では観測問題は解決される。いわゆる物理的世界はモノドから構成される。他人の身体は他のモノドの「外被」である。他者の主観的世界は他のモノドとの間の関係は、予定調和による……。

私がつまづいてしまうのはここで、モノドは世界に同時に一つしか存在し得ないとした方が、よほどエレガントになると思うのだ。「私の世界」モノド」と「他のモノド」が、厳密に同時に存在していると思うから、その間を「予定調和」という不可解な原理で同期させたくなる。同時と見えるのは「外被」だけで、すべてのモノドは「時間を異にして」いて、しかも、時間的に一刹那しか持続しない。そう想定すれば、関係づけるべきは、モノド間の同期性の関係ではなく、時間的先後関係だ、ということになってくるだろう。

II・5 刹那転生バラバラ輪廻？

それにしても、問題が残る。いったい誰が――即ち、どのような視点が――刹那にして生滅する無数の「世界スライス」の間の、時間的

先後関係を定めるのだろうか。

もともと中込がモノド論を構想したきっかけの一つは、物理学的世界像の形成過程における、あるトリックであったと、筆者は理解している。つまり、物理学者は、まず、世界を観測主体と観測対象とに厳密に二分割する。そして、観測対象を物理学的法則の支配する世界として、自己完結的に説明する。しかるのち、観測主体の存在を忘れてしまう。このトリックこそが、(量子力学における観測問題や意識科学といった)観測主体をも科学的世界像によって説明しなければならぬ場面に遭遇したときに、アポリアが生じる源である：。近代科学的世界像とは、世界の外部に立つ観測主体 \parallel 神の視点を前提として構築されながらも、後でそれを忘れることによって成立した世界像なのだ。

筆者が、中込の予定調和説に納得できないのは、そこに、いったんは追放したはずの神の視点——各モノドの外部にあってモノド同士を観測する視点——が密輸入されている疑いがあるからだ。ところが、世界スライスの間の時間的先後を定める場合にも、いわば、世界の外部から世界スライス同士を観測する神の視点が密輸入されてしまわないだろうか。

純粋に、内部の視点からのみ出発して、転生の時間的先後関係を定めなければならない。すなわち、一刹那の「今」を超えた過去や未来はすべて、私の今の一刹那の主観的経験からのみ、理解し、再構成しなければならない。すると、世界スライス同士の時間的先後関係は、かならずしも「客観的時間」の時間的順序に対応しなくともよいことになるだろう。客観的時間の中の時間的順序とは、すでに追放されたはずの神の視点にとってのみ、意味を持つからだ。

では、転生の時間的順序をどう理解すべきだろうか。答えは、ま

ったくのランダム、としか言いようがあるまい。「渡辺恒夫が私Vであるような刹那世界」の後に続くのは、「石器時代の誰かが私Vであるような刹那世界」であり、その次は「百万年後の誰かが私Vであるような刹那世界」というように、そのつどランダムに転生先が決定される：。

刹那転生バラバラ輪廻とでも言いうるこの「世界観Ⅱ死生観」にあつては、時間も空間も解体される。そして、そこから、真の問題が始まる。刹那転生バラバラ輪廻という「真なる世界」から、私たちが実在だと思っている、この、固定的で持続的な時空世界(Ⅱ仮想現実世界!)が、いかにして下向きに構成されるかという……¹⁹。

Ⅲ 現実界も仮想現実界も世界スライスの集合である

読者はおそらく、死と転生を考えるのに、なぜ刹那転生バラバラ輪廻などというものまで持ち出さねばならないかと、いぶかるかもしれない。そこで、本稿の残りでは、筆者が少しばかり携わっている意識研究から出発しても刹那転生輪廻への道をたどれることを、簡単に示してみたい。

Ⅲ・1 意識科学が逢着した「意識の難問」

意識科学国際会議というものがほぼ毎年のように世界のどこかで開催される時代となっているが、ツーソンでの第一回意識科学国際会議において、「脳からいかにしてクオリア世界、もしくは主観的な意識が生じるのか」という、「意識の難問 hard problem of consciousness」が、哲学者のチャルマーズ²⁰によって提起され、話題を招いたのは、周知の話だ。

意識の難問をめぐるっては、様々な「量子脳理論」が提唱されてい

るが、いくら難解高度な理論を構築しても、最初から道をまちがえていては目的地から遠ざかるばかりだろう。ガリレイ以来の近代科学は「客観性」への道を選び、主観的であって、公共的観測にかからない「私」の意識経験、一人称的経験を排除することによってこそ、成功裏に科学的世界像を構築しえたのだった。それを今頃になって「いかにして主観的な経験を説明するか」に頭を悩ますのは、完全密閉式の家を建てておいて窒息しかけ、いかにして内部で空気を作り出すかの研究に着手するのと等しい。分かれ道に戻って「主観性」への道を辿り直すことを、一人称的認識論の構築と呼ぼう。

Ⅲ・2 一人称的認識論の構築

そもそも、「意識」とは常に「誰かの」意識なのである。この当然の事実を忘れるや否や、意識科学はたちまち一人称的視点に混乱をきたし、背理に陥ってしまう。たとえば、「赤い薔薇が見える」という視覚経験を説明するのに、標準的な認識論と生理光学では、「外部世界から来た波長 700nm の光のパターンが網膜の感覚細胞を刺激して電気パルスに変換されてニューロンによって大脳皮質に伝えられ、赤い薔薇という知覚像が成立する」というタイプの説明をする。ここでは「大脳皮質」までは三人称的視点で語られ、「知覚像」で突然、一人称的視点に切り替わっている。そして「意識の難問」が起こる、というわけだ²¹。

他者の意識は観測できないがゆえに、私の意識から出発し、一人称的視点を徹底させ、自分自身の視覚世界を観察することから始めよう。私は水晶体や網膜や視神経を通して外界を見ているのに、それら視覚器官は「見えない」。私は、「健常であってそれゆえ透明」な視覚器官を通して外界をいわば、「照らし出している」というのが、

素朴な印象、素朴実在論的な直観だろう。クオリアなき客観世界から光が目飛び込んで、脳でなぜかクオリアが作られる、などと持って回った説明をする必要はない。私が、認識の光を放射して視覚器官を「透視」し、外界をサーチライトのように照らし出してクオリアを「発見」する、というのが、「私が見る」ということなのだ。

ギブソンの生態学的知覚論²²によれば、「意味」とは脳が作り出すのでなく、環境世界に先在するということになる。世界は元々クオリアに満ち、認識の光がその一部を発見するのである。なるほど、私が見る北極星の姿は、一千年前のものだ。その意は、私は、認識の光を物理学的な光に時間逆行して送り出し、千年過去の北極星へと到達させるということなのだ。中世の認識論では、目に光が入って物が見えるのではなく、目から光が出て物が見える、という説明が主流だったという。かかる「逆生理光学」は、決して既存の物理学体系と相矛盾するものではない。ただ、「私」のいる場面で、方程式の時間の向きを逆転させればよいだけなのだから。

逆生理光学の導入によって、意識の難問はある意味で解決される。「ある意味で」というのは、別の難問が姿を現すからだ。それこそが、すでに本稿でも言及した「意識の超難問」だ。

III・3 独我論的な世界から意識の超難問へ

一人称的認識論が多くの人々を納得させないとするならば、それが独我論的な世界をもたらすからだろう。「目から光が出て物が見える」という説を聞いたからといって、他人の脳の中に「光源」を捜し回るようなバカなことをしてはいけない。一人称的認識論を貫徹するならば、意識とは常に「私の意識」であり、「他者の意識」とは「円い四角」のように思考不能な観念であり、したがって私が宇宙

の中心である、と考えることになるのだ。実際、私が観察する視覚的世界の暗黙の座標原点にこそ、「私」は定位されるのだ。

このような独我論的世界観には、感情的に反発するところがある。この感情的反発の、心理―論理的な源は何か？そもそも、「私」とは誰のことか？渡辺恒夫のことだ。渡辺恒夫は、今朝、満員電車に揺られてきた。大勢の人々の中の目立たない一人として。駅ビルを通り抜ける際、大きな鏡に、群集にまじってホームレス風の男の姿が映った。その瞬間、渡辺恒夫（＝私）は、心の中で叫んでいた：なぜだ！？いかなる理由があつてこのみずぼらしい一人の地球人に宇宙の座標原点が位置しているのだ！？こんな世界はいびつだ。エレガントでない！かくして、意識の超難問が出現する。

意識の超難問を定式化すれば、「地球上の何十億という人間たちの中で、なぜ他の人間でなくこの人間がたまたま \wedge 私 \vee なのか？」ということになる。この問いは、イギリスの哲学者ネーゲル²によつて定式化され、筆者ら^{2,4}によつて意識科学国際会議で提起された。

この問いは、一見、独我論なしでも成立するように思える。けれども独我論ぬきの超難問は、「私という魂が他の人間でなくこの人間に入ったのはなぜか？」といった、二元論を前提とした問いと間違われやすい。超難問における \wedge 私 \vee とは、「諸々の私たちの中の一つの私」ではなく、宇宙に類例のない、唯一絶対の \wedge 私 \vee なのである。つまり、宇宙の座標原点としての私なのである。それゆえ独我論的世界像の中に置かれてこそ、超難問の意味は鮮明となる。「地球上の何十億という人間たちの中で、なぜ他の人間でなくこの人間がたまたま \wedge 宇宙の座標原点 \vee なのか？」

III・4 エレガンスの原理から輪廻転生へ

宇宙の座標原点が、駅の雑踏の中をうろろしているホームレス風 50 代♂（≡ 渡辺恒夫）に位置しているという世界像が、いびつであって受け入れがたいとすれば、もっとエ、レ、ガ、ン、ト、な世界像を捜し求めなければならぬ。選択肢は基本的に二つしかない。私は唯一神の化身であるか、私は転生することによって遍在するかだ²⁵。

① 私は唯一神の化身である

第1案は、Λ私V（以下宇宙の座標原点の意味で用いる）が渡辺恒夫であるのには必然（≡ 隠れた理由がある）なので、けっして世界はいびつではない、と考えることである。たとえば私は本当は宇宙の唯一神であって、何か思い出せない理由があって渡辺恒夫という平凡な地球人として生まれたのかもしれない。これは、キリスト教、特にヨハネ福音書にみられる化身教義とよく似ている²⁶。

② 私は転生することによって遍在する

第2案では、Λ私Vが渡辺恒夫であるのは全くの偶然である、と考える。すると、偶然とは何度も起こるものだから、Λ私Vが誰か任意の人間（異星の知的生命体も含めて）であるという事態は、これまでも何度か起こったし、これからも何度か起こる確率が高い、ということになる。これはすでに、輪廻転生観だ。ただし、独我論的なΛ私Vだけが転生輪廻するのだから、独我転生輪廻とも呼べる。また、この輪廻転生観は、記憶の継承その他のいかなる経験的証拠もなしに、成り立つのでなければならぬ。

ところで、「Λ私Vが誰か任意の人間であるという事態」の時間的最小単位は、人の生物学的一生と一致するものだろうか。私は渡辺恒夫として熟睡している間、誰か他の知的生命体に「転生」しているのかもしれない。あるいは私は、熟睡から覚めるたびに、他の知的生命体へと転生を繰り返してきたのかもしれない（≡ 毎日転生観）。

こうしてみると、生物学的の一生だの一日だのといった偶然的で曖昧な単位よりも、何か時間に基本的で本質的な単位（時間原子）があって、時間原子ごとに私は転生輪廻する、とした方が、よりエレガントに感じられる：。かくして、再び、刹那転生輪廻が姿を現す。そして、そこでは、独我転生観でやや回復しかけた世界のエレガンス性が、ほぼ完全に回復している。丁度、いびつな独楽でも、高速で回転させれば完全な円形に見えるように。

Ⅲ・5 マトリックスの問いへの答え

いまや、本稿の出発点に戻る時が来た。この世は夢ではないか、あるいは仮想現実界ではないか、といった問いへの可能な答えはただ一つ。夢や仮想現実も、いわゆる現実界も、刹那に置き換わる世界スライスの集合であることには何ら違いはない。それらの間に実在性に関して優劣をつけることは、不可能なのだ。

現実界と、夢もしくは仮想現実との間には、後者が前者に依存している、もしくは因果関係がある、という意味での優劣関係がある、という人もいるだろう。けれども、人称的視点を混同しないことにしよう。眠って夢を見ている他人の脳の活動をいくら観察しても、その人が体験している夢や仮想現実といった主観的な体験は、観察できない。それゆえ、いかにして脳の電氣的活動が主観的体験を生み出すのかについて、科学的な言葉で因果論的に説明することもできない。つまり、これこそまさに意識の難問なのだ。他方、視点を一人称に定め、明晰夢の中もしくは仮想現実の中で、私自身の脳を観察したとしても、それもまた主観的体験の一部としての脳に過ぎない以上、現実と体験の間関係は説明できない。

夢、仮想現実、現実界の間に実在性の優劣が付けられないにして

も、別種の実在性の優劣基準がこれらを横断して現存していることが、本稿での明晰夢や自我体験の考察から分かってくる。それは、意識そのものの実在性の優劣であり、内省的自己意識の強度によって測られるものである。私が確実に存在していると分かるのは、つまり、「私が私であるような世界スライス」が存在していると確実に分かるのは、今、ここにいて、とはつきりと意識した瞬間だけである。それ以外の時の存在は、それこそ、昨夜見たはずだが思い出せなくなってしまうた夢のように、あやふやだ。

（わたなべ つねお／心理学）

¹ 従来の呼称では「被験者」。呼称変更については、『心理学・倫理ガイドブック』（日本発達心理学会監修、有菱閣、二〇〇〇）参照。

² エレンベルガー『無意識の発見、上』（木村敏他監訳、弘文堂、一九八〇）三五―三五六頁。

³ ラバージ『明晰夢』大林正博訳、春秋社、一九九八。

⁴ 明晰夢が主として起こるレム睡眠時には、随意に動かせるのは眼球だけである。ただし、こぶしを握る運動も、親指の攣縮という痙攣様の運動として、検出され得る。

⁵ 鳥居鎮夫『夢を見る脳』中公新書、一九八七。

⁶ 渡辺恒夫「夢の意味の危機から明晰夢へ」PSIKO（冬樹社）、第6号、四六・五一、二〇〇一。

⁷ 渡辺恒夫・高石恭子編『^私vという謎——自我体験の心理学』新曜社、二〇〇四。

⁸ マックフィー『見たい夢を見る方法』石垣達也訳、講談社、二〇〇〇。
⁹ Descartes, R.: *Meditationes de prima philosophia*. Vrin, 1641/1967.

¹⁰ この項、佐保田鶴治『ウパニシャッド』（平河出版、一九七八）を参考にしたが、解釈は少し違う。詳しくは、渡辺恒夫『輪廻転生を考える』（講談社現代新書、一九九六）、第一章参照のこと。

¹¹ 中村元『ヴェーダーンタ哲学の発展』春秋社、一九八二。

¹² 渡辺恒夫『^私の死vの謎——世界観の心理学で自我を超える』（ナカニシヤ出版、二〇〇二）、参照。なお、「なぜ、今、ここにいてのか」という事例2や3で紹介した自我体験の問いも、その核心には意識の超難問があると思われる。また、意識の超難問が真の問題かそれとも擬似問題かの議論については、三浦俊彦「意識の超難問」の論理分析」（『科学哲学』35・2、69-81、110011）を参照。

¹³ シュレーディングガー『わが世界観』（橋本芳契監訳、共立出版一九八七）。

¹⁴ 一刹那（ksana）は『俱舍論』の記述をもとに計算すると、1/75秒になるという。ただし、本稿のように刹那を主観的時間の基本的最小単位として考えるならば、固定的な持続時間ではなく、量子的な極微時間から数分までおよぶ、伸縮可能なものとして考えねばならなくなるだろう。

¹⁵ 谷貞志『無常の哲学—ダルマキールティと刹那滅』春秋社、一九九七
¹⁶ 刹那転生輪廻と映画の原理のアイデアは、論理学者 R. スマリヤンの『哲
学ファンタジー』（高橋昌一郎訳、丸善、一九九五）に収められた「悟りを
開いた独我論者」でも語られている。ただし、宇宙の内部を超高速で唯一
の心が人々の間を飛び回るといいう、粒子のようなイメージで語られてい
るため、決して対象化できないはずのアートマンを、対象化して捉えること
になってしまっている。

¹⁷ 三浦俊彦は、「他ならぬ今この瞬間に、なぜ私は渡辺恒夫なのか」と
いう問題は、刹那転生輪廻によっても解答できないと批判する。これに対
する筆者の反批判は、『私の死Vの謎』二二七頁を参照のこと。また、筆者
と三浦の、超難問や輪廻転生をめぐる全論争記録が、

<http://homepage1.nifty.com/t-watanabe/correspondence.htm> に掲載さ
れている。

¹⁸ 中込照明『唯心論物理学の誕生—モノダ・量子力学・相対性理論の統
一モデルと観測問題の解決』（海鳴社、一九九八）

¹⁹ 刹那転生バラバラ輪廻に似た世界観が、仏教論理学を背景に、『夢幻論』
（重久俊夫、中央公論事業出版、二〇〇二）で論じられている。

²⁰ Chalmers, D.: Facing up to the problem of consciousness. In S.R.

Hameroff, A.W. Kaszniak, & A.C. Scott (Eds.), *Toward a Science of*

Consciousness: The First Tucson Discussions and Debates (Pp.5-28).

MIT Press, 1994.

²¹ 脳イメージングで自分の脳皮質活動を「観測」したと想定しても、自分
の脳と知覚像の因果関係を観測によって確かめたことはならない。これに
ついては、拙稿「認知科学の理論的諸問題（I）——心脳問題の一人称的思考
実験」（東邦大学教養紀要、31: 11-20, 一九九九）を参照のこと。

²² ギブソン『生態学的視覚論』（古崎敬他訳、サイエンス社、一九八五）。

²³ Nagel, Th.: "The Objective Self", In C.Ginet, S, Shoemaker (Eds),
Mind and Knowledge, Oxford, U.P., 1983.

²⁴ Watanabe, T.: Psychological and philosophical considerations of the
harder problem of consciousness. *Poster presentation at "Toward a
Science of Consciousness—Fundamental Approaches: Tokyo '99"*, 1999.

²⁵ 以下の論理展開について詳しくは、拙著『私の死の謎』の一九七頁
以下を参照のこと。

²⁶ 筆者は①案を採らない。詳しい議論は『私の死の謎V』に譲るが、①
案は②案の特殊な場合にすぎないからだ。